速度可変壓擦感度試験機

遊江和夫*, 井上正師*, 中原正二*, 蔵持 勇**

わが国で JIS に採用されている BAM 式取譲感度試験機では、荷重は 36kgf まで変えられるが、台座の速度は変えられない。そこで、BAM 式と同様な本体を持ち、台座の速度が変えられる取譲感度試験機を製作し、荷重と速度の両方が取譲感度に及ぼす影響について研究した。その結果、1/6及び1/2爆点において、荷重 W (kgf) と台座速度 V (cm/s) の間には、 $\frac{1}{W} = aV$ + b (aとbは常数) の関係が特度よく成立することがわかった。

1. 緒言

わが国では、摩擦感度試験法として、BAM式がJIS に採用されている。しかし、この方法では、最近多く なった鈍感な爆薬の摩擦感度が測定できないという問 類点がある。

BAM 式摩擦感度試験¹⁾ では、磁製摩擦板と磁製摩擦棒の間に、乾燥した試料約0.01mlをはさみ、36kgfまでの適当な荷重を加え、モーターによって摩擦板を固定した台座を水平に一回往復させて、試料の爆不爆を測定する。

本研究は、荷瓜だけでなく、台座の往復運動速度 (以下、速度という)をも変化できる試験機を作製し て、速度と摩擦感度との関係を研究するとともに、鈍 感な爆薬の摩擦感度測定を意図したものである。その ために、BAM 式摩擦感度試験機と同様な本体に、イ ンパータを接続して、試験機のモータの入力周波数を 変え、台座の速度を変化できるようにした。

2. 実験方法

2.1 試料

本実験に使用した試料は、Table 1 に示したが、いずれも市販の爆薬で、粉砕と篩分けによって分級し、 JISK4810—1979に従って、45℃で5時間乾燥した。

2. 2 実験装置

Fig. 1 に速度可変磨擦感度試験機の略図を示す。この試験機は、BAM 式磨擦感度試験機と同様な本体、インバータ及び操作盤から成り立っている。試験機の荷重は、BAM と同様に、0.5~36kgf の範囲で42段

昭和59年6月13日受理

*防衛大学校

〒239 横須賀市走水 1-10-20

TEL 0468-41-3810

** 庭持科学器披製造所

〒110 東京都台東区池之端 2-3-4 TEL 03-821-8176

Table 1 Test samples

Explosive	Grain size (mesh)	
PETN	48~100	
	~ 32	
DDV	32~ 48	
RDX	48~100	
	100~	
	~ 32	
111.49	32~ 48	
НМХ	48~100	
	100∼	

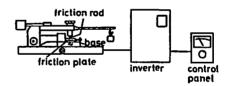


Fig. 1 A schematic of the variable speed friction sensitivity test rig

階に変えることができる。

本体にインパータを接続することによって、モータ の入力周波数を 3~90Hz の間で変化させ、台座の速 度を変えることができる。

2.3 摩擦感度の測定

測定方法はBAM式と同じところが多いので、主と して相違点について記述する。

- (1) 同一荷魚, 同一周波数(すなわち同一速度)で, 連続6回摩擦試験を行ない, 爆の数を求める。試験の つど, フォトセルにより台座の速度を測定する。
- (2) 同一荷重において、周波数を 22.5~82.5Hz の間で 7.5Hz おきにかえ、各周波数において(1)のように

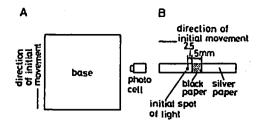


Fig. 2 Measuring method for speed of the base A:a plane figure B:a side view

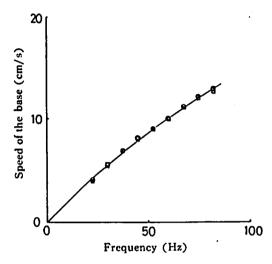


Fig. 3 Speed of the base versus frequency of the motor ○ load: 0 kgf × load: 3.0kgf □ load: 12.8kgf

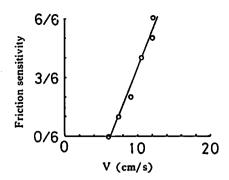


Fig. 4 Speed of the base (V) and friction sensitivity of PETN at 4.2kgf

6回試験する。このようにして、同一荷瓜における 1/6 爆点と 1/2 爆点での台座の速度が求められる。

この場合,周波数を一定にして,荷瓜を変えてもよいが, 鐘の取替えよりは,周波数目盛りの変更の方が容易である。

(3) 次に荷重をかえて、同様な試験を繰返すと、各荷 重における 1/6 及び 1/2 帰点での台座の速度が求めら れる。

2. 4 速度の測定

摩擦板を固定した台座の速度を、反射式フォトセルとカウンタを用いて測定した。測定方法は、Fig. 2 に示すように、台座の側面に銀紙を貼付け、その中央に長さ5mmの黒紙を貼付けた。フォトセルからの光は、最初、黒紙の端から2.5mmの位置に当るようにセットした。台座の移動するとき、光が黒紙にあたる間だけ、カウンタが働く。台座は往復運動するから、カウ

Table 2 Speed of the base and the load at 1/6 and 1/2 explosion points of the sample explosives (48-100mesh)

Postorios	Load	Speed of the base (cm/s)		
Explosive	(kgf)	1/6 Explosion point	1/2 Explosion point	
	3. 0	7. 9	12.7	
DETAI	3. 6	6. 4	10. 0	
PETN	4. 2	7.5	9. 6	
	4. 8	5. 9	8. 6	
	7. 2	11.7	13. 3	
	8. 0	7.9	10. 1	
RDX	9. 6	6.5	8. 9	
i	11. 2	5. 1	7. 9	
	12. 8	5. 2	7. 1	
	7. 2	8. 4	10. 6	
HMX	8. 0	6. 6	9. 4	
j	9. 6	5. 4	7.4	

Table 3 Speed of the base and the load at 1/6 and 1/2 explosion point of sample explosives with various grain sizes

Fuelssins	Grain size	Load	Speed of the base (cm/s)		
Explosive (mesh)		(kgf)	1/6 Explosion point	1/2 Explosion point	
		8. 0	9. 0	15. 9	
	~32	9.6	6. 5	8. 9	
		11. 2	4. 7	7. 5	
		8. 0	8. 5	12. 9	
	32~48	9. 6	7. 1	9. 9	
		11. 2	6. 1	9. 3	
		12.8	5. 6	8, 7	
	100~	8.0	8. 7	11. 3	
		9. 6	7. 4	10. 2	
		11.2	5. 8	8. 8	
		12. 8		4. 5	
нмх		7. 2	8. 9	11. 9	
	~32	8.0	6. 7	10. 3	
		9. 6	5. 5	7. 7	
		7. 2	9. 8	11.7	
	32~48	8.0	8. 7	10. 9	
		9. 6	5. 6	7. 7	
		7. 2	11. 3	14. 8	
	100~	8.0	8. 1	11. 2	
		9. 6	5. 3	8, 8	

ンタは往路と復路の合計1cmの移動に要した時間を表示する。かくて、この間の平均速度が計算できる。

3. 实験結果

3.1 周波数と台座の速度の関係

荷取 0, 3.0 及び 12.8kgf の状態で、周波数を 22.5 Hz から 82.5Hz まで 7.5Hz おきに変えて、台座の速度を測定した。速度は同一周波数、同一荷重で10回測定し、その平均値をとった。結果は Fig.3の通りである。

周波数を増すと、速度は若干上に凸の曲線状に増加 する。荷頂による台座の速度への影響は認められない。

3.2 荷重及び台座の速度と爆発率の関係

いずれも粒度 48~100 メッシの PETN, RDX 及び HMX について、荷瓜をかえ、各荷瓜において速度を変化させて、爆発率を求めた。

結果の一例を PETN, 荷重 4. 2kgf の場合について示すと、 Fig. 4のようになった。このような12の回帰直線は、いずれも台座の速度 V (cm/s) と爆発率の間によい直線関係が成立し、相関係数は最低で0.87であって、10/12 が0.9以上であった。

この回帰直線から 1/6 及び 1/2 燥点を求めて, Table2 に示した。各爆薬ともに,荷瓜の増加に従って,1/6 及び 1/2 燥点における台座の速度は小さくなる。

3.3 爆薬の粒度と爆発率の関係

Table 1 に示したように、市販の RDX と HMX を

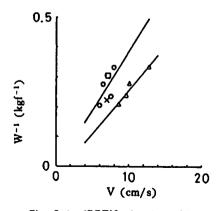
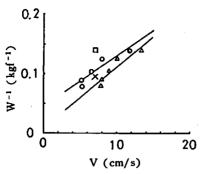
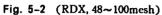


Fig. 5-1 (PETN, 48~100mesh)





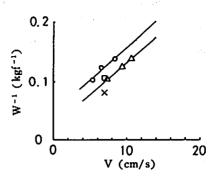


Fig. 5-3 (HMX, 48~100mesh)

Fig. 5 Prot of W⁻¹ (kgf⁻¹) as a function of V (cm/s) at 1/6 and 1/2 explosion points
 ○: 1/6 explosion point, △: 1/2 explosion point, □: 1/6 explosion point
 by BAM method, ×: 1/2 explosion point by BAM method.

Table 4 Values of constants a and b, and of carrelation coefficientr in equation (3)

Explosive	Grain size (mesh)	Explosion point	a	b	Correlation coefficient r
PENT	48~100	1/6	0.40	-0.087	0. 69
	407-100	1/2	0. 29	- 0. 036	0. 97
	~ 32	1/6	0. 83	5. 0	1.00
		1/2	0. 38	6.5	0. 96
Ī	20 40	1/6	1.6	-1.1	1.00
אַרוּט	32~ 48	1/2	1.0	-0.63	0. 96
RDX	48~100	1/6	0.85	4. 5	0. 93
		1/2	1. 0	0. 85	0. 93
	100~	1/6	0. 99	3.4	0. 97
		1/2	1.5	-4.8	0. 97
	~ 32	1/6	0. 97	5. 4	0. 96
		1/2	0. 82	4.1	1.00
	32~ 48	1/6	0.79	5. 9	0. 99
		1/2	0. 81	4.1	0.98
HMX	48~100	1/6	1. 1	4.8	0. 97
		1/2	1. 1	2.4	1.00
	100~	1/6	0. 57	7.5	0. 99
		1/2	0. 57	5.7	0. 98

粉砕と篩分けによって、~32、32~48、48~100, 100 ~メッシに分け、それぞれの粒度について、3.2と同じ 方法で 1/6 及び 1/2 爆点を求めた。結果は Table 3 に 示した。なお、48~100 メッシについては、 Table 2 に示してある。

4. 考察

4.1 爆点における荷重と速度の関係

摩擦試験機の丸棒と板が摩擦するとき,全摩擦熱量 は速度が変っても変らないが,熱の発生速度は速い方 が大きくなる。

丸棒の端面が、平板上を速度 V (cm/s)で滑るとき、 丸棒の端面が全部平板と接触し、摩擦面の温度は一様

Table 5 The load at 1/6 and 1/2 explosion points for the BAM and the new method friction sensitivity test (Speed of the base was 7 cm/s)

Test rig	Explosive Explosion point	PETN	RDX	нмх
BAM	1/6	3. 27	7. 19	9. 43
method	1/2	4. 43	10. 67	12. 34
New	1/6	3. 70 (1. 13)	9. 52 (1. 32)	8. 0 (0. 85)
method	1/2	5. 88 (1. 33)	12. 5 (1. 17)	10. 0 (0. 81)

(): Ratio of the load (kgf) at the explosion point for the new and the BAM method friction test

と仮定すると、摩擦面の退度上昇は次式のようになる。。

$$T - T_0 = \frac{\alpha \mu W g V}{J \pi r} \sqrt{\frac{1}{2\sigma k r}}$$
 (1)

ここに、T は摩擦面の温度、T。は周囲の温度、 αは 丸棒に伝わる熱の割合、μ は動摩擦係数、W は丸棒に かかる荷重、g は重力の加速度、J は熱の仕事当量、 r は丸棒の半径、αは Newton 冷却則を用いたときの 冷却係数、k は丸棒の熱伝率である。(1)式で、発火温 度 Tおよび周囲温度 T。を一定とすると、同一装置で は(1)式は次のようになる。

$$WV = \text{const}$$

すなわち、荷重Wの逆数と速度Vの間には、原点を通る直線関係が成立する。

本装置の場合, 丸棒ではなく, 端面が球面状の摩擦棒で駆捩するが, 1/6 及び 1/2 爆点における W-1 と V との関係の例として, 48~100 メッシの PETN, RDX 及び HMX について図示すると, Fig. 5 のようになり, 原点を通らない。したがって, 実験式としては次式で表わされる。

$$1/W = aV + b \tag{3}$$

ここに、aとbは常数である。

この実験式の相関係数は、一つの例外を除けば、 0.93~1.00となり、相関関係はよいと云える。Table 2及 び Table 3 から常数 a, b を計算してまとめたのが、 Table 4 である。

なお、(2)式よりも $W^{\bar{z}}V$ =const, あるいは $\frac{1}{W}\nu_{\bar{z}}=aV$ +bの方が、より厳密に各種条件を考慮した式であると云われている 3 が、この式の方が僅かながら相関係数が小さくなった。

4.2 粒度の影響

Table 4 を見ると,同一爆薬の同一粒度においては, 1/6 爆点と 1/2 爆点での a の値は,比較的近似してい る場合が多い。すなわち、両直線は平行に近い場合が 多い。しかし、粒度と a の値の間には、関係は認められない。 b も粒度との関係は認められない。

石塚等⁴ は粒度 44 ~ 300 μ の PETN と RDX について、BAM 式際擦感度を測定し、粒径の大きい方が 摩擦感度が鋭感になると云っている。今回の実験では、 粒径は 100 メッシ (147μ) 近傍から32メッシ(495μ) 近傍で範囲が狭く、しかも粉砕したので形状にあまり 変化がないために、粒径の影響がでなかったのであろう。

4.3 BAM 式摩擦感度試験機による測定値との関係

これらの値は、Fig. 5 にも記してある。 Table 5 からわかるように、PETN及びRDXでは、同一速度で、BAM 式の方が本試験機より少ない荷重で 1/6 及び1/2 爆点が得られた。HMX では逆に本試験機の方が少ない荷重でよかった。Table 5 の()は、BAM式の値に対する本試験機の値の倍数である。倍数の幅は、0.81 から 1.33 倍まで及んでいる。このような測定値の相違の原因としては、測定誤差のほかに速度の測定では、中心部分の 5 mm の間だけを測定しているが、始動における速度も発火に大きな影響をもっているためと思われる。

本試験機は、前記のように、BAM 式では測定できない鈍感な爆薬の摩擦感度を測定することを目的の一つとした。しかし、台座の速度と荷重が大きくなると、摩擦の際に音が発生し、爆発音(鈍感な爆薬では、爆発音の小さいものが多い)との区別が困難になる。この問題の解決が、今後の課題である。

5. 結 論

BAM 式摩擦感度試験機では、台座の速度は一定である。そこで、速度可変で、本体は BAM 式と同様な 摩擦感度試験機を製作し、その特性をしらべた。その 結論として、次のことがわかった。

(1) 燥点における荷重W(kgf)と台座の速度 V (cm/s)との間には、次の関係が成立する。

1/W = aV + b

ただし、aとbは常数である。

- (2) 実験範囲内では、粒度と摩擦感度の間に明確な関係は認められなかった。
- (3) 同一台座速度における BAM 式と本試験機の爆点 での荷重には,若干の相違があり、 PETN と RDX で

はBAM 式の方が、HMX では本試験機の方が、荷重が少なかった。

(4) 本試験機で、台座の速度と荷頂が大きくなると、 摩擦音の発生により、爆発音との区別が困難になる。

文 献

- 1) 中原正二, 「火薬学概論」, P. 160 (1983) 産業図 書
- F. P. Bowden and D. Tabor, "The Friction and Lublication of Solid", P. 35 (1954), Oxford.
- 3) ibid, P. 54.
- 4) 石塚孝, 岡崎一正, 工業火薬, 34, 86 (1973)

A Variable Speed Friction Sensitivity Test Rig

by Kazuo HASUE*, Tadashi INOUE*, Shoji NAKAHARA* and Isamu KURAMOCHI**

The load in the BAM method friction sensitivity test rig, which is adopted in Japanese Industrial Standards, is able to be changed from 0.5kgf to 36kgf, but the speed of the friction plate is constant.

A new friction sensitivity test rig was proposed. The main part was the same as the BAM method friction test rig; however, the friction plate speed could be varied.

Using this test rig, the effects of load and speed on the friction sensitivity of some explosives were tested. The following equation was held true for 1/6 and 1/2 explosion points;

1/W = aV + b

where W was the load (kgf), V was the speed of the friction plate (cm/s), and a and b were constant.

(*The National Defense Academy, 1-10-20, Hashirimizu, Yokosuka-shi, Kanagawa-ken, 239, Japan.

**Kuramochi Kagaku Kikai Co. Ltd., 2-3-4, Ikenohata Taito-ku, Tokyo, 110, Japan.)